

相愛大学学生の生活と意識に関する実証研究

〔その6〕

Lifestyle and Consciousness among Soai University Students :
An Empirical Study

長 野 孝 男

I. 緒 言

わが国における大学、短期大学、高等専門学校を含めた高等教育機関への進学率は、今や50%近くになり、まさに大衆化された大学になったといえよう。またこのことは、少子化にともない18歳人口の減少によって全国の大学に大きな影響をもたらした。

今日の大学においては目的意識を持たないまま入学する学生が多く、キャンパスライフを過ごす上で、各大学とも魅力あるカリキュラムを作り、有意義な大学生活を送らせようと努力し、工夫をこらす中で運営しているのが、現代の我が国における大学の姿ではなからうか。

今回の研究は、学生の生活と意識について調査分析し深く理解することにより、今後の教育活動に何らかの提言を示唆できればと考えられた。

我々は、これまで、「相愛大学、相愛女子短期大学生の学園生活に対する意識の比較 (1983)」、「音楽学部学生の学園生活の意識と余暇活動について (1984)」、「相愛大学生の健康に関わる諸問題について (1988)」、「相愛大学学生の入学目的別タイプ別にみた学生の心理的側面に関連して (1989)」、「相愛大学学生の1990年度海外語学研修参加者に関わる諸問題 (1991)」、過去5回にわたる調査を報告してきた。

これら調査は、本学学生のライフスタイルをさまざまな角度から考察してきたが、本研究では、それらの先行研究をもとに、特に1989年学生を

対象に実施した学生生活についての意識調査に焦点をあてながら今回同様の調査を実施した。

このことによって10年前の学生生活や学生の意識と現在学生的生活意識とを比較検討することによってどのような変化が生じてきているのか、それとも考えられたほどの変化が認められないのかを、明らかにしようとした。

こうした目的を達成することによって、現代の学生像を明らかにしようとした。

また在学中の学生の生活の意識を詳細に把握することは、今後の本学の学生指導のあり方を展望する貴重なデータとなることは明らかであり、昔の学生と現代の学生とは違うといった現象面だけの主観的判断ではなく、データをもとにした客観的判断の材料を提供することを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査期間：1997年11月中旬より1999年1月下旬まで
2. 調査対象：相愛大学生（427名）・相愛女子短期大学学生（334名）・他大学学生（90名）・他女子短期大学学生（70名）、合計921名を対象とした。
なお、今回は女子学生のみを対象とした。
3. 調査内容：本調査は、学生生活全般に関する調査36項目よりなる調査用紙を作成し配布回収した。
本研究では、36項目中6項目にしぼって考察することにした。それらの項目は以下のとおりである。
 - ・ 本学受験の動機
 - ・ 入学目的に関して
 - ・ 本学学生であることの誇り
 - ・ 学部学科の満足度
 - ・ どのようなタイプの学生か
 - ・ 入学後の実態とは合到しているかどうか

4. 結果の整理：集計にあたってはSPSS (Statistical Package for the Social Sciences) プログラムを用いた。集計の一部については、パーソナルコンピュータを使用した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 本学受験の動機

一般的に大学への受験を気軽にするものが多くなった現在、学生はどのような理由で本学を受験し、学部、学科を選択したのかを把握するために、fig.1に示す12項目より選択させ重複回答を求めた。

その結果本学を選んだもっとも強い動機は、1987年のデータでは「先輩、先生に勧められて」が第1位(30.8%)であったが、今回、1998年の調査結果では、受験したい学部があるからが第1位(35.4%)を占めていた。

どういう学部、学科があり、どういったカリキュラムを持った大学なのかを、選択の理由にしていた。第2位には、今回の調査では「自分の学力に合った」34.9% 大学を選択していた。第3位は「先輩、先生に勧められて」23.2%と、1987年の1位であった項目、すなわち先輩や先生の勧めで受験を決定していた。さらに、1987年調査項目にみられた「本学の特色と学風に憧れて」「教授陣がよいから」受験したが、それぞれ0.6ポイント、7.9ポイント減少していることが明らかにされた。

受験者たちは、先輩や先生から勧められて大学を決定しているのではなく、自ら学びたい学部、学科、またその中味であるカリキュラムを選択の材料としつつ、自己の学力と相談しつつ決定しているといえよう。一昔前のアカデミックな大学のイメージを模索するのではなく、将来を見越した実利的な考えのもとに、大学、学部、学科を選択しているといえよう。

相愛大学学生の生活と意識に関する実証研究

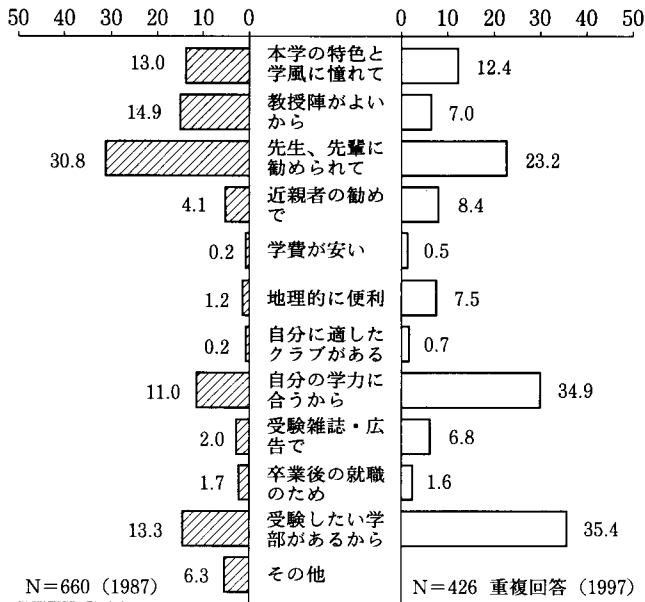


fig. 1 本学を受験した動機

2. 入学の目的

大学進学率の高い我が国において、学生は何を目的に大学に進学してくるのかは、興味の持てるところである。

fig. 2 で示したように、11項目の中より重複回答させた結果は次に示すとおりである。

1987年で第1位であった項目「専門的知識を得るために」46.8%は今回の調査では38.2%と8.6%減少していた。このことは、専門性の追求のために入学した学生が減少していることが明らかにされた。

これに対して「学歴をつけるため」の項目では1987年当時3.7%であったのに対し、今回は26.9%と23.2ポイント増加しており、大学に学歴を求めて入学してくるものが増加していた。

次に「将来の就職のため」の項目では今回18.3%に対し、1987年は6.1%であった。12.2ポイントも上昇していた。就職のために四年制大学に

進学してくるものが増えていることを表わしていた。

その他「教養、人格の陶冶のため」は1987年、7.59%であったものが、97年では18.5%と10.9ポイント増加していた。

過去において87年調査においては、音楽学部学生は専門教育を受けている意識が強く46.8%¹⁾。また、毎日の生活の中に専門性を意識したライフスタイルが組立てられていることがうかがえた。²⁾ 今回の調査では、両学部とも専門意識の低下がうかがえた。

また、「青春のエンジョイのため」では87年5.7%であったものが今回は16.4%と10.7ポイント増加していた。こういった遊び感覚での入学もうかがえた。こうしたことも現在の大学の特徴であるといえよう。

これらの結果から明らかにされたことは、将来の就職に役立つ専門的知識を得ていこうとしたものが顕著に表われていた。また青春をエンジョイし、学歴をつけて将来の生活を豊かにしようとしていることがわかった。まさに現在の大学は実利主義的な目的で入学する学生が増加しつつあるといえよう。

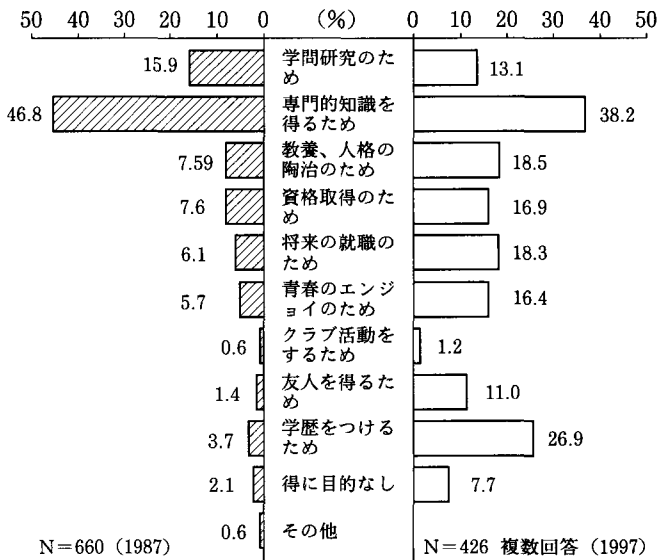


fig. 2 大学入学の目的

3. 本学学生であることに誇りを持っているか

相愛大学学生であることに誇りを持って学生生活をしているか否かをみてみた。

fig. 3 に示したように、3項目より選択させた結果、「大学に誇りを持っている」としたものは97年調査では40.2%あったものが87年は53.4%と13.2ポイント低下していた。自己の選択した大学に対する誇りを失っている傾向を示した。また「誇りを持っていない」は97年24.3%となったが、87年調査は33.1%であった。8.8ポイント減少していた。

「どちらともいえない」は97年、35.5%であったが、87年は13.5%あった。その差22.0ポイント増加していた。

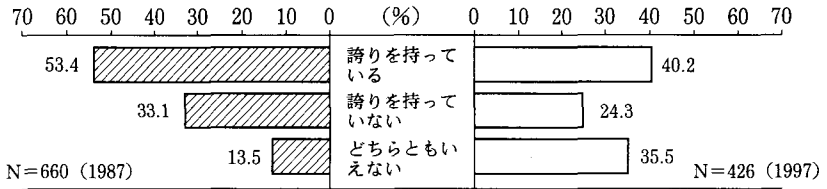


fig. 3 本学学生であることの誇りの頻度

4. 現在の学生生活の充実度

学生生活についての充実度を調査した。

fig. 4 に示したように、3項目中1つ選択させた結果、「なんとなく充実している」97年、48.2%「充実している」15.5%となった。これらを合わせると63.7%が大学生活を「充実している」と思っているようであった。しかし、87年調査では「充実していない」の項目では12.3%97年15.2%と回答している学生がみられたが、彼らの日常生活がどのようなものを明らかにする必要がある。

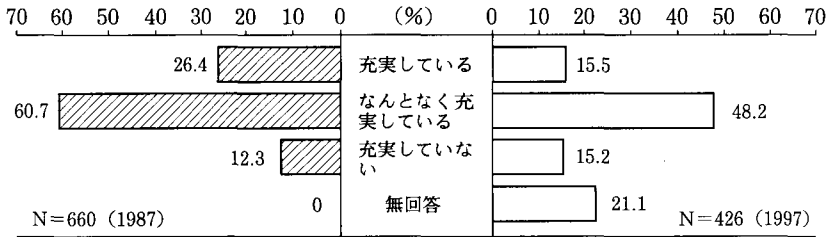


fig. 4 学生生活の充実の頻度

5. 現在在籍している学部学科に満足しているか

現在在籍している学部、学科に対して満足しているかについて4項目中1つを選択させた結果を、fig. 5に示した。「満足している」は、97年20.8%であったが、87年では48.1%となっていた。「満足はしていないがやむをえない」は97年35.4%、87年38.0%「失望している」97年18.2%、87年6.3%、87年学生よりも11.9ポイントも上昇していた。大学の学部、学科に失望しているものが約12ポイント増加していたが、こうした原因を探ることも必要である。

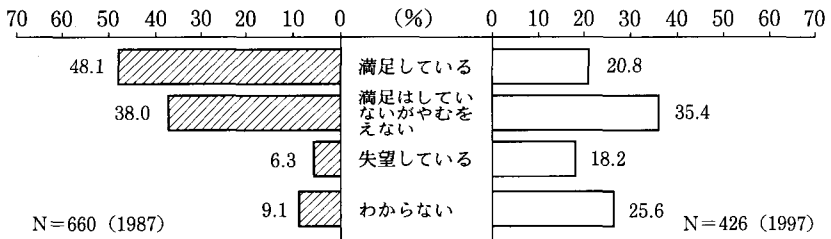


fig. 5 現在在籍している学部、学科の満足の頻度

6. あなたは自分をどのようなタイプの大学生と思うか

毎年学生数が増加する中でいろいろなタイプの学生が入学してくる。学習意欲旺盛で将来大学院に進学して研究者になりたい者、社会生活のため専門的知識、教養を身につけたい者、大学の学歴だけがほしい者等々、ま

さに我が国の大学はさまざまな要求の学生が、在籍し大学生活をしている。

そこで、本学学生を6つのタイプに分類し調査することにした。①「勉強中心型」学問への探求心が強く、熱心な研究態度をもって真理探求に励むタイプ。②「レジャー中心型」自分の所属する大学に対しては愛情や忠誠心はもっているが、大学生が持たねばならない勉強には関心をもつことなく遊びまわるタイプ。③「アルバイト中心型」大学生としての学問や研究には目を向けず、アルバイトを中心に生活設計を立て大学にはあまり気を向けずタイプ。④「クラブ活動中心型」大学生としての学問研究はあまりせず、クラブ活動をするために大学に来ているタイプ。⑤「ノンポリ型」(nonpolitical) 大学には登校して来るが、これといった勉強もせず、クラブ活動もせず何んともなく生活しているタイプ。⑥「その他型」5つのタイプのどれにも該当しないタイプである。

以上6つの型を、学生たちに示すとともに、87年調査と同じ説明をしたのち1つを選択させた。

結果は、fig. 6に示した。今回も87年調査同様「ノンポリ型」が1位で38.4%であった。87年調査31.0%よりも7.4ポイント増加していた。「勉強中心型」は87年、20.9%、97年25.8%で4.9ポイント上昇し、勉強する者が増加していた。また、「レジャー中心型」は87年は、15.3%であったが、97年は13.6%となり1.7ポイント減少していた。「アルバイト中心型」については、97年には年2.1ポイント増加していた。87年調査で明らかにされたことに、アルバイトの経験者が77.8%存在していたが、今回³⁾2.1ポイント増加を示したことで、他大学の同調査では80%程度であるのでほぼ同じになっているといえよう。「クラブ活動中心型」は、87年は7.0%であったが、今回はさらに減少し5.5%になっていた。こうした現象からすれば今後、体育会、文化会活動自体の存立にかかわる問題となる可能性が高まっているといえよう。

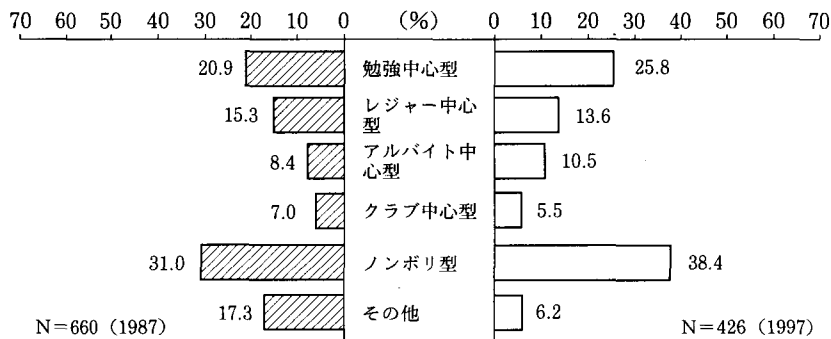


fig. 6 自分自身どのようなタイプの学生か

7. 入学前に描いていた大学のイメージと入学後の実態とは合致しているか

大学進学にあたり、さまざまな目的を持って入学して来た学生が、入学前と現在のイメージとの差異について、87年同様調査を行った。調査方法は、3項目より1つを選択させた。結果を、fig. 7に示した。入学前のイメージと「ずれている」としたものは、87年では62.2%であったが、97年は61.0%となり、大きな差異は見られなかった。しかし入学前に描いていた大学像と実際の学生生活との差をみた場合、大きなズレが生じていることがわかった。「合致している」についても87年26.3%であったものが今回は18.0%となり、8.3ポイント減少していた。

本調査の結果、学生は、入学以前に描いていた大学のイメージと実態とのギャップを大きく（強く）感じている学生が6割以上もいることが明らかにされた。

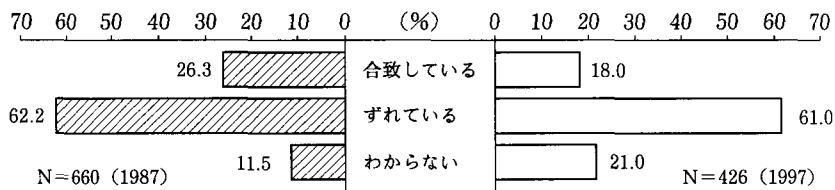


fig. 7 入学前に描いていた本学のイメージと実態は合致しているか

過去（1987）と現在（1997）学生の生活比較について述べてきたが、さ

らに現在学生を理解するために次の8項目について考察することにした。

- ・ 履修登録科目数について
- ・ 1日の授業関連の予習、復習時間について
- ・ 大学への出席の割合について
- ・ 1週間のアルバイトの日数について
- ・ 授業の内容に関して
- ・ 勉強の意欲について
- ・ 単位取得について
- ・ ダブルスクールについて

これらの項目については、「カイニ乗検定」を実施しているがこれらのデータは本学と他大学との比較においては意味を成すが、今回は一項目を用いたので検定結果は示さないことにした。

Table. 1に「今年度、あなたが履修登録している科目数は何科目か」の結果を示した。

履修登録が最も多いのは、15～20科目未満(36.5%)で、10～15科目未満(26.1%)が次いだ。

履修科目数の多いのは、回答者の44.6%が1回生であったためである。

Table. 2に「あなたは、毎日、予習、復習にかけている時間はどれくらいですか」の結果を示した。

「ほとんどしない」49.4%、「30分から1時間」19.2%、「30分まで」12.9%であった。半数の学生は予習、復習をしていないことがこの調査でわかった。

Table. 3に「あなたは大学の授業にどれくらい出席しているか」の結果を示した。

51.2%の学生は9割以上出席していると回答していた。またほとんど講義に出ていない学生も存在していることが明らかになった。

Table. 4に「あなたの1週間当り、何日アルバイトをしているか」の結果を示した。

回答を見ると、「週2日」が1番多く(17.7%)、次いで「週3日」(17.0%)、3位が「週4日」(15.1%)であった。7.8%のものが週5日以上アルバイトをしていた。

週4日以上ともなると勉強との両立は困難であると考えられる。

Table. 5に「あなたが、これまでに受けた授業で興味をもてる内容の授業はどれくらいあったか」の結果を示した。約半数以上の学生(51.2%)は「どちらともいえない」の回答を示し、「興味ある授業が(23.9%)」、「興味ない授業が(24.9%)」と二分された。しかし、興味の基準を示していない調査であったことも問題があると考えられる。

Table. 6に「あなたが今まで受けた授業について特に意欲のわく授業がどれくらいあったか」の結果を示した。

「どちらともいえない」は60.4%となり、「意欲のわいた授業」は10.4%と回答された。この数字は、考えていたよりも低いものであった。

Table. 7に「あなたが今まで受講した科目の単位取得について」の結果を示した。

「勉強しなくても簡単にとれた」(21.5%)、「簡単に取得できなかった」(36.8%)、「どちらともいえない」(41.7%)となった。

簡単に単位が取得できたと回答した学生についてはインタビューする必要があると考えられる。

Table. 8に「ダブルスクール《学生が大学に通学しながら一方で外国語の会話や資格取得のため専修学校などに通学する》に通っているか」の結果を示した。

「通っている」(19.8%)、「通っていない」(80.2%)となり、約2割の学生が放課後に他の教育機関に通学していることが明らかにされた。

以上 8 項目について、在学生に回答を求めた。

Table. 1 履修登録科目数

相愛大学	5科目 未満	5～10 科目未満	10～15 科目未満	15～20 科目未満	20科目 以上	合 計
	51	49	111	155	59	425
	12.0%	11.5%	26.1%	36.5%	13.9%	100.0%

N=425

Table. 2 授業関連の勉強時間

相愛大学	ほとんど しない	30分 まで	30分から 1時間まで	1時間から 3時間まで	2時間から 3時間まで	3時間 以上	合 計
	211	55	82	45	23	11	427
	49.4%	12.9%	19.2%	10.5%	5.4%	2.6%	100.0%

N=425

Table. 3 出席の割合

相愛大学	1割未満	1～3 割未満	3～5 割未満	5～7 割未満	7～9 割未満	9割以上	合 計
	2	1	7	41	156	217	424
	.5%	.2%	1.7%	9.7%	36.8%	51.2%	100.0%

N=425

Table. 4 アルバイトの日数

相愛大学	アルバイト していない	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	合 計
	155	25	75	72	64	21	9	3	424
	36.6%	5.9%	17.7%	17.0%	15.1%	5.0%	2.1%	.7%	100.0%

N=425

Table. 5 興味をもてる内容の条件

相愛大学	は い	いいえ	どちらとも いえない	合 計
	102	106	218	426
	23.9%	24.9%	51.2%	100.0%

N=425

Table. 6 勉強の意欲がわく授業

相愛大学	は い	いいえ	どちらとも いえない	合 計
	44	124	256	424
	10.4%	29.2%	60.4%	100.0%

N=425

Table. 7 単位取得について

相愛大学	は い	いいえ	どちらとも いえない	合 計
	92	157	178	427
	21.5%	36.8%	41.7%	100.0%

N=425

Table. 8 ダブルスクールに通っているか

相愛大学	通っている	通っていない	合 計
	90	365	455
	19.8%	80.2%	100.0%

N=425

総 括

1. 本学受験の動機をみると、以前は「先輩、先生に勧められて」受験していた、今回は、自分自身で考え、学部、学科を選択「自分の学力に合った大学」を選択理由にしていた。

2. 大学入学目的をみると一昔前においては「専門性中心」に選択していたが、最近では、「学歴をつけるため」「教養、人格の陶冶のため」「将来の就職のため」「資格取得のため」と実利的な面と結びつけている学生が多数存在していた。

3. 大学に「誇りを持って通学している」学生は一昔前より減少し、それに対して、誇りを持っているのかいないのか明確でない学生が増加していた。

4. 以前に比べて、大学生活の充実度は全体的に低下していた。

5. 現在在籍している学部学科に対して、以前の学生以上に不満足、また失望感を持っている学生が増加していた。

6. 学生をタイプ別にみると「ノンポリ型」が一段と増加し「レジャー型」から「アルバイト型」に移行する傾向にあった。一方「勉強中心型」は以前より増加していた。

7. 入学前に描いていた大学のイメージと入学後の実生活に大きな差があることが明らかになった。

以上の総括から、今日の学生は、一昔前の学生に比べ、実利的目的を持ちながら自らの道を自らが決定し、入学してくるものが増えていることがわかった。だが一方で、「学問研究」「専門的知識」の追求といった方向より、学歴、就職、今後の生活を視野に入れつつ、しかも遊び感覚で大学を位置づけている傾向がうかがえた。また、大学生であるという誇りも減少傾向にあり、大学生活に充実感をもつ学生の数は低下していた。さらに、現在の景気低迷を反映してかアルバイトに精を出さなければならず、苦しい状況もみられた。

長野孝男

全体として、学生をタイプ別にみると一方で勉強中心型が増える中で、ノンポリ型、レジャー型、アルバイト中心型が増える傾向にあった。

およそ10年前の調査結果と比較を試みたが、学生は社会情勢や経済情勢に左右されながら、一昔前と比べると苦しい環境におかれていることが明らかとなった。入学後のイメージもそれに伴って変化し、入学後の学生生活の様子を分析すると様々な課題を我々に提示していることが解った。

参考文献

- ①長野孝男（1980）「女子学生の生活意識について」相愛大学、相愛女子短期大学研究論集第27巻 音楽学部編
- ②長野孝男（1983）「女子学生の生活意識について（その2）」相愛大学、相愛女子短期大学研究論集第30巻 音楽学部編
- ③長野孝男（1989）「相愛大学学生生活実態調査報告（その5）」大学目的別タイプ別にみた学生の心理的側面に関連して相愛大学研究論集 第5巻（通巻第36号）